認定介護福祉士資格取得者に期待される実践力

野田由佳里[*,1)]、植田裕太朗[2)]
[1)]聖隷クリストファー大学、[2)]群馬社会福祉専門学校

１．目的

認定介護福祉士を対象とし、資格取得過程において、どのようなものに影響され、具体的にどう変化したかの変容の実際を明らかにすると共に資格取得者の実践力がどう変化したのかを明らかにすることを目的としている。特に介護実践能力に着目し、介護学生にとってのキャリアモデルになり得るかを検討した。

２．方法

インタビュー調査（倫理承認番号 21030）
調査対象者：スノーボール方式によって調査協力を得られた認定介護福祉士
データ分析：質的研究法・事例コードマトリックスの作成

３．結果

・調査期間：2021 年 11 月 5 日～12 月 26 日
・調査対象者：認定介護福祉士 7 名
・分析過程：セグメントしたデータを、オープンコーディングを行った。
・コーディング 174 個・焦点コーディング 28 個・概念的カテゴリー9 個

４．考察

認定介護福祉士資格取得者のインタビューを通して、資格取得において大きな要因となるのは、内発的な動機が大前提であった。研修中には【葛藤や躓き】があったものの、【資格取得の喜び】を抱いていた。研修継続の困難性は、勤務調整や課題ではなく、≪モチベーションの維持≫であり、認定介護福祉士としての資格の有用性や、新しい資格におけるアイデンティティを形成する過程においても、受講生仲間という他者の存在が重要であったと捉えた。現場と学びの乖離や、コンフリクトの繰り返しの中で、苦しみ、揺らぎながら成長している過程や、実践力そのものの捉え方が、資格取得過程の中で≪介護労働の特性≫と再認識している姿も見られた。インタビューの中では、研究対象者らは“やってみないとわからない介護の面白さ”“誰でもできるけど、誰でも続けられる仕事ではない”と、介護の有用性を語られた。本研究を通して認定介護福祉士の介護実践能力に着目したが、実践能力の可視化までは至らなかった。一方、介護観や、介護を言語化し、発信する力量は計測不可能であるものの『力』や『魅力ある人材』を体現しており、介護学生にとってのキャリアモデルになり得ると導き出せた。“個人資格ではなく地域や組織の財産”と自分自身をも鼓舞する言葉を表する者に、実践で得た自信や学びを継続する意味を見出した。認定介護福祉士の実践力をどのように評価し、介護学生にその実践力を示すのかが今後の研究課題である。

本研究の成果は、資格制度の発展過程における認定介護福祉士の実態を示す資料の一部の提示である。今後、認定介護福祉士養成制度が成熟することが重要だと思われる。